

## 特集 学び続ける教師

■巻頭言/私の歩んだ道	安藤 駿英	4
教師のライフコースと学び	秋田喜代美	6
教師の自信	有村 久春	9
表の学びと裏の学びで、教師の自己効力感を高める	河本 明彦	12
ニシンに恋して	大熊 光治	15
書に親しんで	安田 鉄男	18
仲間と学ぶ	窪内 直人	21
教師、四〇にして大学院に学ぶ	山崎 茂雄	24
舞台に魅せられて	春口 明朗	27

### 連載

[教師力]アップセミナー 子どもとともに成長する教師をめざして(5) 中学校教育・教科担任制のよさと課題～課題克服の鍵はチームによる生徒指導・学習指導の充実と部活動の負担軽減～	大関 健道	30
QUを活用したPDCAサイクルで教育実践の向上をめざして(5) ICTの徹底した活用で教育実践の向上を目指した学校の取組	河村 茂雄	33
[主体的・対話的で深い学び]を創る(2) 小学校理科 新単元 第三学年「光と音の性質」 一 理科の見方・考え方を働かせ、子供自らが問題を見いだす学び	塚田 昭一	36
続・説明文・意見文を書くことの指導(6) 小学校・意見文を書く指導～中高学年～	青山 由紀	39
木下是雄と「言語技術の会」ルネッサンス(4) 教科書の内容(1) 一貫性について	渡辺 哲司	42
わたしたちの学校づくり(24) 論理的思考力を高め、自立した学び手を育成する	山崎 晃	44
教育相談はこう学ぶ! 一全国各地の特色ある教育相談研修(5) 福岡県教育センター 地域及び学校で生徒指導・教育相談を推進していく人材を育成する研修	古川 裕士	48
通常学級の実践から学ぶ特別支援のヒント52(5) 行動のコントロールを援助する教師の働きかけの工夫	森 正樹	50
こうすればうまくいく! スペシフィックSGE(6) SGEを校内に広めていくための模索 ～機会をとらえ、少しずつ進めていくことを通して～	内野 博之	52
授業をみる・語る・研究する(4) Mix型の授業の知覚	河野 義章	54
公認心理師の資格をもつガイダンスカウンセラーの実践(5) 体育・スポーツ領域における心理支援	土屋 裕陸	56
講座キャリア心理学—キャリア発達を支援する(5) キャリア自己効力感	下村 英雄	58
教育統計・測定入門(78) 当てはめたモデルの適合性の比較(2)	服部 環	60

# 教師、四〇にして大学院に学ぶ

東京都立桐ヶ丘  
高等学校主幹教諭

やまざき しげお  
山崎 茂雄

## 要旨

- ★安易な動機で教員となり定時制の現場で挫折した筆者は、心理学のおかげで生きる指針を得て、教員としてのやりがいを見つけた。
- ★以来、心理学への憧れをあたためつづけ、四〇歳で東京学芸大学大学院に派遣研修の機会を得た。現場を離れた一年間は、仕事に疲れた頭と心を確実にリフレッシュしてくれた。
- ★そこで恩師河野義章先生に出会い、現在のライフワークにつながる「カットイメージ」の研究をまとめることができた。
- ★現場に戻った私は、定時制、全日制を経て、昼夜間定時制高校チャレンジスクールの学校づくりで、オリジナルなアイデアを生かした成果をいくつも上げることができた。
- ★四〇歳の大学院研修は、教員人生の大きな転換点であった。

## 1 教員人生をふり返って

私は都立高校の国語科教諭として三五年間勤め、一昨年度末に定年を迎えた。現在も同じ学校に再任用フルタイムで勤務しているが、本当の退職後は、教育現場で開発してきたオリジナルの技法を、大人(シニア)の生涯学習に活かす、というライフワークを準備している。

その中心となる「カットイメージ(読解法)」

は、心理学を国語の授業に応用した、映画を観ているみたいに小説が読める、技法である。それをテーマに修士論文をまとめたのは、ちょうど四〇歳になる年に派遣の機会を得た、第十四条大学院研修においてであった。

ふり返ってみると、それは私の教員人生における大きなターニングポイントだったと思う。

## 2 心理学を学びたいという思い

大学は文学部の文芸科で、アルバイトで自活しながら作家を夢見ていた。しかし、いつしかフリーターの生活にも飽き、「いい小説を書くために、人並みの社会人の苦労をしてみたい」と、安易な動機で都立高校教員となった。

その軽薄さは、夜間定時制高校での学級崩壊という手ひどいしっぺ返しを招いた。荒れた現場で追い詰められて心身ともに疲弊し、初任校を三年で異動せざるをえなくなった。

「このままの自分ではだめだ」と考えた私は、KJ法を活用して「自分とは何か」を見つめ、自律訓練法を応用した毎朝三十分の瞑想を習慣にした。カウンセリングを学び、ワークショップにも参加した。そうした中で私は、人生観が一変するような根本的な気づきを経験した。

その結果、異動した二校目の定時制では、「いつもニコニコ山崎先生」と言われるほどのポジティブな教師に変貌した。そして、自分から心を開けば開くほど応えてくれる生徒たちを相手に、初めて教師の仕事にやりがいを感じた。

授業でさまざまな工夫を重ね、生徒会顧問としてステージ発表の文化祭に熱中し、担任の生徒たちと泣き笑いの日々を送った。同僚たちにも恵まれて、教員としての仕事がおもしろくならず、無我夢中で働いた三十代だった。

そんな私に、自己表現としての文学はもはや必要ななかった。その代わり私の中に募ってきたのは、心理学を本格的に学びたい、という思いである。自律訓練法やカウンセリングに救わ

れ、臨床心理学や学習心理学の本ばかり読むようになっていた。心理学系の研修会に参加しては、グループワークを通じて個人の気づきを促すワークショップの手法を授業に取り入れたいと思ひ、教室で自己流の試行錯誤を重ねていた。

大学時代は文芸科で小説を読み書くことばかりしていたので、専門的知識のないことがコンプレックスだった。そこで心理学を専門にしたいと思ひ、大学院に進む道を探し始めた。

休職して地方の大学で二年間学べる制度に憧れ、瞑想の中でその生活をイメージしたりしていた。すると、東京都でも、自分で選んだ大学に一年間休職して通える第十四条大学院制度が始まった。それを知って心は躍ったが、家庭の事情からすぐには応募できず、希望を翌年送りにした。しかしその間に、前述した「カットイメージ」のアイデアが浮かび、実践を始めた。国語の授業の技法だが、ぜひこれを心理学のフィールドで研究してみたいと思った。また、カウンセリング理論には助けられたが、専門とするなら、臨床心理学よりも授業に活かせる教授・学習の分野だと感じていた。

私は進学先に東京学芸大学を選び、翌年、都の選考に満を持して応募した。研究計画をびつしりと書き、面接でも志望を熱く語った成果で、無事に派遣決定通知を手にすることができた。

### 3 大学院での生活

十四条の制度では、一年目は現場を離れて大学院に学び、二年目は現場に戻って修士論文に取り組む。一年とはいえ、十数年ぶりに仕事を離れて過ごす学生生活は、文句なく楽しかった。

現役学生と机を並べてグループワークやディスカッションをした。文献講読や統計学の授業は久々の英語、数学の勉強で、予習がたいへんだったが、いままで眠っていた頭を使う貴重な機会だった。図書館に籠って文献を探したり、キャンパスのベンチでボーっとしたりするのも、教員生活では得られない時間だった。

同じ十四条研修で来ている教員どうしは、しばしばランチをしたり飲みに行ったりして、何でも話せる友達になれた。現任教員向けの夜間大学院の授業を多くとり、さまざまな学校種の先生方とも交流できた。心理学演習のグループ共同研究では、レポートをまとめるために、夏休みにメンバーで自主合宿をし、プレゼンの準備もした。最高に楽しい時間だった。

そうした学生ならではの時間を過ごす中で、長年の教員生活で一定のパターンに慣れてしまっていた頭と心は、確実にほぐされていった。そのことが、のちの私の創造的活動の源になったことは間違いない。

### 4 修士論文と河野先生

修士論文の主旨は、現在、日本教育カウンセラー協会会長の河野義章先生だった。当時は白

髪交じりの髪を長めに伸ばし、気さくな雰囲気、飄々としていつもニコニコ笑っておられた。心理学分野の主任教授格なのに、入試でも入学式でも、一人でてきて説明していた。まるで世話好きの印象が、初対面のころからあった。

授業の話術がうまく、内容が具体的で、いつも学生を飽きさせない。教授・学習の心理学を講じながら、あるべき授業の姿を、身をもって示している講義だった。

河野研究室が私の居場所となったが、身近で見ていると、学部生の卒論でも、実に親身に指導している。河野先生は、「研究者」である前に「教師」であつたと思う。そこが、まず「研究者」であり、その成果を教えようとする他の先生方と、はっきり違っていた。大学院を出て小学校に勤めた思い出をしばしば語っていたが、学生一人一人を懐ふかく受け入れ、理解し、育てる姿勢は、根っからの「教師」であつた。

私の修論指導でも、私が熱く語る「カットイメージ」の話を親身に聞き、自己流のテーマを受け入れてくれた。「あとは心理学のフィールドにいかにか載せるかだな」とくり返し言い、文献研究や研究構想の課題を次々と与えた。

あるとき、実験計画について「被験者に絵を描かせたら？」と河野先生が言われたとき、私は強く反論した。ちなみに「カットイメージ」は、小説の場面を心の中に細かなカットとして思い浮かべ、それに応じて本文に区切り線を入

れていく手法である。絵は描かず、(最初は)ことばにもせず、心の中でイメージをよく見て、本文に線を入れていく。絵を描くのもことばを使うのも苦手な生徒たちが、線を引くだけで学習に参加でき、深い読み取りができる。そこに最大の価値があると確信していたからである。

しかし、なかなか実験計画はまとまらなかった。あるとき、本文テキストの上に枠をつけて、その中に人物の配置など概略図を描く方法を考えた。詳細な絵ではない。概略を描くだけだ。そう思つて、何気なく河野先生に話した。

私の説明を聞いた先生は、しばし無言だった。しかし、様子が違う。いつもニコニコしている先生が無然とした表情で、「あなたは、絵を描かないとあれほど言つてたじゃないか」。その一言で、私はハッと目が醒める気がした。

計画がなかなかまとまらない焦りから、私は易きに流れようとしていた。自分がいちばん大切にしていた根っこの方針を、あやうく手放すところだった。そんな私を河野先生は厳しくたしなめ、踏みとどまらせてくれたのだった。

結局、実験は「次の小説を心に映画を上映するようにイメージして読みなさい」と事前指示した二群の被験者に、「段落分け」課題と「カットイメージ」課題をそれぞれ与える形で実施した。その結果、直後の理解度テストの成績に有意差が出ただけでなく、後日行った内容の自由再生で、カットイメージ群は、主人公の葛藤が深まる山場の場面や問題解決の喜びがあふれ

る。結末の場面をよく記憶していた。カットイメージが小説の感動を深めることも数値で裏づけることができ、想像以上の成果だった。

修士論文の口頭試問では、河野先生が冒頭、「試問というより、このカットイメージをいかに世に広めていくかの作戦会議にしよう」と言ってくれたのが、何よりうれしかった。

## 5 現場に戻って

現場に戻った私は、その後、定時制、全日制と異動する中で、実践を深めていった。いままですり誤りで自己流の教育実践を続けていたが、大学院での学びを経て、自分のアイデアを現場で役立つ具体的な方法論として提案できるようにになった。全日制高校では、「総合」のキャリア学習プログラム開発や有志でのピアサポート講座などの実績を上げることができた。

その力をさらに発揮できたのは、自ら希望して開校時に異動したチャレンジスクール都立稔ヶ丘高校においてであった。チャレンジスクールは、不登校経験などをもつ生徒のために都が計画した、単位制の三部制定時制高校である。五校目となった稔ヶ丘高校では、一年生に人間関係スキルと学習スキルを学ぶ科目「コーピング」を置いたが、その開発を私が担当した。

人間関係スキルでは、早稲田大学人間科学学術院の菅野純先生、嶋田洋徳先生と連携して、認知行動療法に基づく授業づくりを進めた。

学習スキルのプログラムは、現場の先生方と

協力しながら独自に開発を進めたが、自分の専門となった教授・学習の心理学を存分に活用することができた。

さらに、一年次「産業社会と人間」に始まり、学校設定科目で二年、三年と積み上げていくキャリア教育プログラムの製作にも取り組んだ。

これらの科目づくりの成果は書籍化や雑誌の取材で広く知られ、各地で同じ課題に悩む新しいタイプの高校の先生方の見学来校や、私への講演依頼が続いた。

その他、学力向上や進路意識を高める取り組み、参画意識を広げる教員研修会など、開校以来九年間、学校づくりのためのさまざまな提案・実践を重ねることができた。

その後、同じチャレンジスクールの老舗である都立桐ヶ丘高校に異動して、現在に至る。

一般都民向けのカットイメージ公開講座(四週連続)も、年二回の開講ですでに五年になる。その中で大人にも読書の喜びを広げることが実証され、ライフワークにしようと考える決め手となった。「カットイメージの本を出す」という河野先生とのお約束から二〇年。その夢も、ようやく今年中には実現の運びである。

ふり返ってみると、私にとって四〇歳で経験した大学院研修は、その後の教員人生を方向づける大きな転換点であった。

※私の実践の詳細は、個人サイト「教育エンジン」(<https://www.ed-net/>)をご覧ください。